

姜 克實 (ジャン・クーシー)

教育分野 (領域) 歴史学・考古学分野 (日本史学)

研究・教育のキーワード 歴史認識、アジア主義、大正デモクラシー、戦争史

研究者としての私

日本近代、現代史 経済思想史、比較文明論、比較近代化論、歴史認識、アジア主義、社会事業思想史などを研究している。最近、歴史記録方法への関心から、戦争史の戦例について、比較の手法で日中両国の戦史記録の特徴を調べている。

歴史記録には証拠、事実の検証に耐えうる普遍的科学性があり、時代の移り変わりとともに姿、目標を変えてゆく政治の宣伝とは、異質のものであると言わねばならない。すなわち、宣伝とは、政治の策略性、一時性、誇張性の特徴を持つことばであるのに対して、歴史事実は、その科学性、永久性、真実性を以て特徴とすることばであると理解して差し支えはない。しかし、現実では、歴史への政治介入の現象が存在し、政治宣伝と歴史事実を混同し、あるいは政治宣伝の内容を歴史事実として記録しようとする傾向が多く見られる。とくに政治集団とその対立が存続する近、現代において、民族、国家間、政治組織間の争いの歴史を記録する場合、この傾向が強い。

また、最近では、オーラル・ヒストリー (oral history) の方法が流行り、研究者も含めて多くの人々は文献資料をよそ目に口述記録の収集に執心している。歴史事件の当事者を探し当て、話を記録し、あたかも証人の口述こそ、最も信頼できる歴史の真実かのように扱うのである。筆者は、口述の証言を認めないわけではないが、無批判に口述資料を優先に信頼、採用する方法には、問題があるのではないかと考えている。オーラル・ヒストリーによる証言が比較的リアルに伝えるのは、ある事件で当事者が一瞬に植え付けられた強烈な感情的印象である。例えば事件に与えられた感動、驚愕、苦痛、悲傷、憤りなどである。一方、研究に必要とする重要な基礎的情報、例えば、事件の発生日、時間、天候、具体的場所、参加者の人数、名前、事件の経緯、結果などについて、正確に記憶する人はほとんどいない。人間の記憶能力には限界があるためである。

このような問題を意識して、私は記録文献資料による歴史の還元を勧め、自らも実証研究を試みているのである。

教育者としての私

過去の戦争評価をめぐる国家間の対立——所謂歴史認識問題は、戦後 70 年が経ったいまでも解決のめどが立たず、国家、民間の交渉・交流の中の避けられない難題として度々政治問

題化し、今日の国際化・共生社会形成を妨げる重大な障害になっている。

この難題を解決するための道筋を探るには、今一度、歴史認識問題の核心を解析し、対立の特徴と原因を突き止めてから、対策を講じる必要があると感じる。

私の見解では、今日我々が一括して「歴史認識問題」と称する概念には、一、「歴史事実」、二、「歴史感情」、三、「歴史観」という三つの要素があり、度々政治問題化したのは、実は「歴史事実」をめぐる対立ではなく、国民間の「歴史感情」の対立なのである。そして、このような歴史感情の対立を激化させた裏には、一つの「歴史事実」を元に形成した各国の異なる「歴史観」があることを認識しなければならない。

「歴史事実」の対立とは、同じ事実に対する認識の相違で、発生した理由は事実認識の不足、限界にある。もし政治的妨害要素を排除できれば、その差は単純の科学的な学問となり、史料の発掘、調査の研究によって縮められる。したがって各国間の歴史認識問題の核心とは言えない。一方、「歴史感情」の対立は性質が違う。一旦歴史認識の対立が国民レベルの感情対立、憎悪に波及すると、もはや解決の道筋が見えなくなる。今日のいわゆる「歴史認識の問題」は、ほとんどこうした国民間の歴史感情の対立ではないか。国民レベルの感情の対立はどのように形成したのか？ 私は全学向けの一般教育の科目「日本史を見る眼」において、国境を超える立場で、近代の戦争認識を取り上げ、日本人の歴史認識、戦争認識の問題点、およびその形成過程を政治、学校教育の特徴と関わらせて講義している。

私が書いたもの

『現代中国を見る眼——民衆から見た社会主義』丸善ライブラリー、1997.

『近代日本の社会事業思想——国家の「公益」と宗教の「愛」』ミネルヴァ書房、2011.

『石橋湛山』吉川弘文館、2014.